

韓国人女子留学生の役割意識と就職決定 —— ある大学 4 年生に対するインタビュー調査 ——

A Case Study on Roles & Working Decision of a Korean Female International Student: Based on Interview Survey

李 奎 台
LEE Kyutae

李 奎 台
Lee Kyutae

〔要旨〕

本研究は、ある韓国人女性留学生の日本での就職決定がどのようなプロセスでなされており、そこにどのような複数の役割意識が影響を与えているのか、明らかにすることを目的とした。そのために、韓国人留学生に対してインタビューをし、その内容を Super（1980）の枠組みを用いて質的に分析した。結果として、本研究で対象とした学生の日本での就職決定には、労働者としての役割意識と家庭人としての役割意識が、大きく影響していたことを記述することができた。

Key word: 韓国人女子留学生、就職決定、役割意識、就職活動



1. はじめに

日本学生支援機構の調査によると、留学生の65%は日本での就職を希望しているとのことであり、その数は決して少なくない。しかし法務省入国管理局の調査によると、平成25年度に卒業（修了）した留学生数は39,650人であり、平成26年に在留資格を「留学」から「就労」に変更した者は、卒業者の約32.7%の12,958人だった。つまり、65%の学生が卒業後日本で働くことを希望しているにも関わらず、現状では日本での就職を希望している留学生の、約半分しか就職できていない。この数字を上げるために、大学などの教育機関は就職活動支援に取り組んでいる。それら就職活動支援は、留学生をいかに就職させるかに焦点を絞っているため、留学生が担う労働者としての役割のみに注目する。しかし、留学生が就職活動において考慮するのは、労働者としての役割に限定されない。そのキャリア決定には、母国にいる親の子としての役割、日本市民又は母国の市民としての役割なども、影響するだろう。子どもとして母国に戻り親のそばにいたい、労働者としては日本で働きたい、という役割間の葛藤もあるかもしれない。それら多様な役割を十分に考慮せずに進路を決定しては、たとえ就職できたとしても、早期離職や帰国のきっかけになりうるだろう。

本研究の参考となる先行研究としては李・宮城（2018）が挙げられる。李・宮城（2018）は、Super（1980）による「キャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチ」を理論的枠組みとし、留学生らが日本留学をどのように決定し、その決定にどのような役割意識が影響を与えたか、明らかにした。李・宮城（2018）の研究は本研究と同様、キャリア決定における役割意識の記述を試みている点で参考になる。以下で李・宮城（2018）について詳細に見ていく。

李・宮城（2018）は調査のために、2名の韓国人留学生（ユギョン（女）、ヨンハ（男））に対してインタビューを行い、彼らがどのように「日本留学」というキャリア決定をするに至ったのかについて、Super（1980）の理論を枠組みに考察した。結果として、二人とも「学生」としての役割意識（「教師の指示に従うべきだ」など）と「子」としての役割意識（「両親の意見に従うべきだ」など）が、「日本留学」というキャリア決定に大きくしていることが明らかになった。その背景として、渡日前に二人が属していたコミュニティが家庭と教育機関だけであり、「子」と「学生」という役割意識はそれらのコミュニティに関連していると考えられた。ただし、李・宮城（2018）は、来日前に下した「日本留学」というキャリア決定に限って分析しているため、彼らが来日後、どのようなコミュニティに参加し、どのような対人関係を築いたかについては言及されていない。そのため、来日後に属したコミュニティや対人関係が、日本留学終了時のキャリア決定にどのように影響するかは明らかにされていない。また李・宮城（2018）によると、2名は同じ役割意識に影響を受けながらも、そのキャリア決定のプロセスには、顕著な違いもあったということである。具体的には、ユギョンが自身の専攻決定及び留学決定において、母親と教師の意見に従っていた一方、ヨンハは自らの専攻を決定後に両親と教師に相談する機会を設けて

いた。そこから李・宮城（2018）はキャリア決定における自律性の違いを、論じている。自立性は、日本留学中に両親と離れて生活することで身につける可能性もあるが、先述の通り李・宮城（2018）は、留学後の彼らの変容を分析範囲に含めていない。

そこで本研究は、ある1名の留学生の就職活動及び就職に至るまでのプロセスを縦断的に調査することで、どのような役割意識が、日本留学終了後のキャリア決定に影響したのか、記述することを目的とする。1名を対象とするため結果を一般化することはできないが、その分厚く記述することで、留学生の就職をどのように教育機関が支援していけばいいのか、議論の材料とすることができると考えている。

2. 研究方法

研究方法として、本章では理論的枠組みとなる Super（1980）の理論と、具体的なデータ収集方法と分析方法について、順次説明する。

2.1 Super（1980）の理論的枠組み

本研究では李・宮城（2018）を参考にし、Super（1980）が提唱した、「キャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチ」を、理論的枠組みとする。Super（1980）によると、人は複数の役割意識を持っており、「新しい役割を担ったり、古くなった役割を捨てたり、既存の役割の性質に重大な変化を生じさせたりするとき」にその都度、キャリア決定を行っているとのことである（p.291）。そのキャリア決定のプロセスを、Super（1980）は以下のよう図示している。

図1によると、新たなキャリア決定を行うときは、その決定に必要となることを考えたり、その人の過去の経験（古いデータ）を振り返ったり、試行錯誤を繰り返したりするとのことである。本研究では、留学生による日本での就職決定のプロセスを、この図を用いて分析することとする。

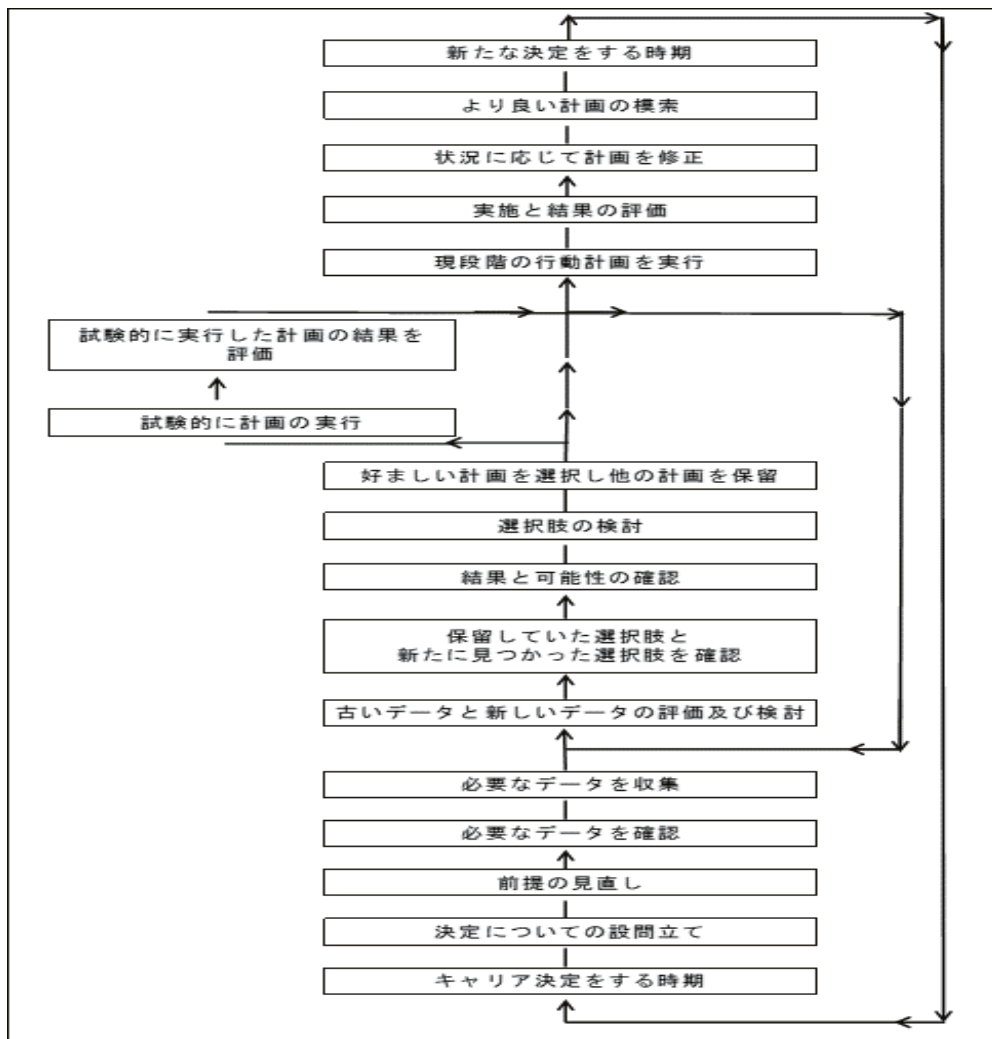


図1 キャリア決定の仕方のディベロップメンタル・モデル
(Super 1980、p.294、李・宮城 2018 から引用)

2.2 分析の手順

本研究では、ある韓国人女子留学生の役割意識と就職決定プロセスを明らかにするために、以下のような分析手順を踏んだ。

まず、インタビュー調査で得られたデータから調査協力者の就職決定と関連あるエピソードを抽出し、そこからどのような役割意識が見られたかを分析する。その後、図1のキャリア決定の仕方のディベロップメンタル・モデルに合わせて、留学生の日本での就職決定の仕方の図を作成し、考察する。

2.2.1 調査協力者

本研究ではシオン（仮名）という、ある一人の韓国人女子留学生を調査協力者とする。シオンは筆者と同じ在日韓国人教会に通い、筆者と同じく韓国語を母語とする留学生である。同じコミュニティ内の同じ母語の者を協力者としたのは、思ったことや感じたことを自由に語るために、筆者との十分な信頼関係と母語でのコミュニケーションが有効だと考えたからである。

2.2.2 インタビュー調査

インタビューでは日本での生活、日本人に対する印象、期間ごとに変わる所属と人間関係、エピソードなどを聞いた。インタビューは2014年6月と2014年11月の2回で、1回60分程度であった。インタビュー内容は全てICレコーダーで録音し、全て文字化した。全てのインタビューは韓国語で行ったため、まず韓国語で文字化してから日本語に訳した（本文中、韓国語部分は省略）¹⁾。

2.3 倫理的配慮

調査協力者に対する倫理的配慮として、調査前に研究目的及び研究倫理について説明し、研究協力及び公表することの許可を得た。なお、インタビューで話した内容であってもプライバシーの侵害に繋がる恐れがあることはインタビュー後、自由に削除を要請できるようにした。この他、人間文化研究機構が定める「保有個人情報保護規程」ならびに「大学共同利用機関法人人間文化研究機構における研究活動に係る行動規範」を参照・遵守した。

3. 結果

本章では、シオンの語りから分析した結果に基づいて、シオンの就職決定がいかに下されたか、Super（1980）の枠組みを用いて考察する。分析結果を見ていく前に、シオンの経歴を概観したい。来日前から2回目のインタビューまでの期間に、シオンが所属していたコミュニティと、主な出来事を表1に示す。

上記のように、シオンは就職活動の結果、最終的にアルバイトをしていた出版社から内定をもらい、日本に滞在することを決定する。以下、特に日本での対人関係についての語りと、就職活動に関する語りを提示しながら、分析結果を見ていく。日本での対人関係についての語りにも注目するのは、それがシオンの就職決定に影響を与えているからである。

表1 シオンの来日から最後のインタビューまでの所属及び出来事

時期	所属・身分	主な出来事
2007年3月 ～2010年3月	【韓国】 ・日本語塾 ・ジュエリー系専門学校	・高校卒業後、地方都市からソウルに上京する ・ソウルで日本語塾とジュエリー系専門学校に同時に通う ・母に日本留学を勧められる ・ジュエリー関連資格を取得する
2010年4月 ～2011年3月	【日本】 ・ジュエリー系専門学校	・専門学校の6か月目に、専門学校を辞める決心をする ・東京都内4年制大学への進学を母に勧められる ・英語の書類関係の問題が生じ、希望大学進学に失敗する ・4年制大学進学の情報収集のため短期大学進学を決心する
2011年4月 ～2013年3月	・短期大学 (ホテルトラベル専攻)	・東京都内の英語教育の出版社でアルバイトをする ・アメリカ人の恋人ができ、その後別れる ・ハーフの友人、外国籍の友人が多くできる
2013年4月 ～2014年3月	・4年制大学3年生 (ビジネス系専攻編入学)	・東京都内の短期大学を卒業後、4年生大学に編入学する ・ヨーロッパ系の恋人ができる ・就職活動を開始する ・企業インターンシップに2回参加する
2014年4月 ～2014年10月	・大学4年生 ・所属教会	・東京都内の教会に通い始める ・アルバイト先(英語教育出版社)から内定をもらう

3.1 日本での対人関係

まず来日直後に専門学校に通っていた時期の、日本人についての語りを、三つ提示する。

語り1 専門学校の日本人同級生に対する印象

奇妙な子しかいませんでした。専門学校の子たちは、日本人は特に、ものすごく個性が強い。特に芸術に携わる子たちには。《中略》精神世界も本当におかしいし。

語り2 相性が合わない日本人

日本の子達は、そういうのあるじゃないですか。今日はすごく親しいけど、(次の日になると)知らんぷりするでしょう？それが耐えられなかったんですよ。それで私は最初から(日本人との交流に)行かなかったです。《中略》日本に来たのは無駄なことだったと、少し思いました。人とこんなに相性が合わないのに、どうやって生きていくか。

語り3 親切的なふりをする日本人

日本人と仲良くなるのは、本当に大変です。〈何が？〉(日本人は)親切的なふりをする。〈親切じゃなくて？どうやって気づいた？いつ感じたの？〉親切的なソウルレス。〈それは何？ああ、魂がないってこと？〉優しいけど、ソウルがないの。

語り1から3を見て分かるように、シオンは来日初期から日本人を否定的に評価していた。他

の学生との相性の悪さはシオンにとって重大であり、それが留学生生活を難しくしていると、シオンは考えていた。

続いて短期大学に進学してからは、さまざまな国の留学生と交流を深めたようである。それについて以下のように語った。

語り4 短期大学での留学生との交流

短期大学はすごく楽しかったです。〈その時、周りにはどんな人がいた？〉私の周辺に、その時からハーフの子とか外国人達が増え始めました。《中略》遊んでいたのは、さっきの（イラン人の）女の子とペルーと日本のハーフの女の子、あとフランスと日本のハーフの子だけど、養子になって韓国人牧師様のところで育った子がいます。《中略》日本人友達は今もほとんどいない。外国人の子たちともっと多く遊びました。

語り4に語られたように、短期大学に入った頃から、周りに外国人の友人が増えはじめた。シオンは彼らとクラブなどに行きながら、2年間の楽しい学生生活を送ったようである。そして彼らが日本で経験したことを聞いたことが、シオンの日本人に対するイメージに、影響をもたらしたということである。以下にそれについての語りを示す。

語り5 短期大学で出会った友人らの経験

私の周りに外国人が多くて、それで差別されるのを沢山見るじゃないですか、一緒にいると。特に私は（日本語を）話せるけど、話せない子達も多いから。《中略》日本人は、（外国人が）自分たちと違うと、そのような考えをととても強く持っているんですよ。

語り5に語られたように、短期大学に通っていた頃の外国人及びハーフの友人に差別談を聞いたことで、日本人に対するイメージがさらに悪くなったとのことである。彼らのおかげでシオンは、友人として放課後一緒に遊ぶことができ、外国人として日本で生活することの大変さ（差別など）を共有することができた。そして彼らに聞いた差別談は、専門学校で形成されていた日本人に対する否定的なイメージを、さらに強化したと考えられる。

さらに次に提示するのが、4年制大学に編入後に就職活動をしている時期についての語りに見られた、日本人に関する語りである。

語り6 「私」らしくない「日本人の」対人関係形成

厚い壁を感じます。私はとても気楽に話すほうだけど。話したいことがあったら話す、そのように生きてきたのに。彼ら（日本人）は何回も包み込んでいる感じがして。私が、なんでそれを解き開く（相手の言葉の含意を解釈する）必要があるのか。それで合わないんですよ。私は幼い時から、そういうのがありませんでした。私が一番嫌いな言葉が、「私はあの子と

親しくなりたい」という（言葉です）。そういう子たちが、大嫌いです。なぜ人を選んで付き合うのか。親しくなりたいといってプレゼントをあげて、話しかけるような子たち、大嫌いです。《中略》（私は親しくなるための）努力をしないんです。

語り6に語られたように、シオンは日本人との間に厚い壁を感じており、自分は気楽に話すのに、日本人はそうではないと感じていた。この日本人に対する否定的な評価は、専門学校時及び短大時代の評価から、つながっている。以上が、シオンによる日本での対人関係についての語りである。

3.2 就職活動の開始から終了

続いて、シオンが自身のキャリア決定について直接言及している語りを、見ていきたい。

シオンは2013年に4年生大学に3年生として編入学した後、就職活動を始め、翌年1社から内定をもらった。ただし、シオンはその後も就職活動を続けていた。まず、シオンが当時どのような居場所を持っていたのかについて、語りを引用する。

語り7 私の心の居場所

心の居場所については、私もとても疑問でした。私が心の居場所は、どこだろう。〈そう？〉私は家も、家庭事情が少しあって、特に家が心の居場所だと思ったことがなかったから。《中略》それほど家が心の居場所だと思うとか、居心地よく家で暮らしたこともなくて。若干家にいると居心地悪いんですよ。そしてひとりっ子だから。そして韓国の友達たちは、一つのグループがあって。（今は皆で）集まることはないけど。あの子たちはみんな離れています。《中略》以前は、たぶん彼氏に心を置いていたと思います。〈『元彼』？〉そう。2人は一つのかたまりだと、考えていました。もう関係ない人です。《中略》ただ、なぜそのように2年間を浪費したのか、分らないです。

上記のように、シオンは、以前は別れた恋人に心を置いていたということを語ってくれた。時間は前後するが、シオンが恋人と別れる前の語りを、以下に示したい。

語り8 恋人と一緒に立てていた将来の計画

とりあえず、ここで何年か働くつもりです。（彼と）どうなるかが問題ですが。彼と一緒に計画を立てましたから。結婚するとか（の話を）したわけではないけど。結婚することを考えて話をしてきたから。少し時間を置いて考えることにしたのは、彼はスペイン出身じゃないですか。あと、イギリスで働いてから来たと、前言ったじゃないですか。だから彼は定着したがるんですよ。しかし、家族は私が帰るのを望んでいるはずなのに、彼のせいで帰れないと、（彼が）私に申し訳ないじゃないですか。《中略》私の考えでは、韓国に行く可能性も

なくはないです。《中略》（日本で）仕事、少なくとも3年働いて。〈ここに定着する気持ちはないの？〉定着はできればしたいです。私がしたかったらします。できます。さっき言ったように、安定したい気持ちが強いです。早く結婚したいし、家ほしいし、子供ほしいし、こういうのが強くて。それでそのように安定する人がいなかったら、今みたいな状況では、私は韓国に帰って母と祖母といるのが正しいから。

語り8に語られたように、シオンは恋人との結婚も意識していた。そしてその交際期間は、シオンの就職活動の時期とも重なっていた。上の語りからは、シオンが家庭人としての役割意識「将来の居場所は、配偶者になる可能性がある人と一緒に決めるべきだ」を持っていることが分かる。そして恋人と別れた心境として、交際期間の2年間で「浪費した」と語っていた（語り7）。ここから、彼と一緒に立てた将来の計画を破棄し、大学卒業後のキャリア決定のことで、家族がいる韓国に帰国するか、日本に滞在しながら働くか、悩んでいたことが推測できる。

結局、シオンは大学を卒業した後、日本で働くことを決心する。日本に心の居場所はないが、大学卒業後は、「労働者として働くべきだ」という役割意識を持っていたからこそ、キャリア決定だと考えられる。そしてシオンは、就職後に労働者として、どのように日本人と対人関係を形成していくかについて、以下のように語っていた。

語り9 対人関係形成の必要性

私はさっき話したように、対人関係なんかに気を遣わないタイプだから。仕事したら事務室の人にも、外で営業を通じて会った人にも、好感を持たせるような方法を知っていなければならないけど。それ（好感を持たせる方法を身につける必要性）を沢山感じて。

語り9に語られたように、シオンは、働くためには、一緒に働く人に好感を持たせる必要があると考えていた。そして自分の対人関係の形成について「対人関係なんかに気を遣わないタイプ」と述べており、これから社会人として仕事関係者と友好的な関係を築いていけるのか、心配している様子がうかがえる。

これまで接触する機会を持ってきた日本人は主に同級生であり、利害関係もなかったために、相性が合わなければ無理に関係を築く必要もなかった。しかし社会人になると、利害関係もあるため、相性が合わない人であっても一緒に仕事をしていく必要があるだろう。ここから、シオンが労働者としての役割意識「利害関係のためにはときに相手に合わせる必要がある」を持っていると思われる。

そしてシオンは、アルバイトとして働いていた会社から、唯一の内定を得る。内定を得た後も少しの間就職活動は続けていたが、結局は内定をもらった会社で働くことを決断する。その決断について、シオンは以下のように語った。

語り 10 就職活動の終了

いいところへ就職しようとして苦労するよりは（就職活動を終えることを選んだ）。私が好きな仕事は、正直に言って NPO のような仕事が好きなんです。でもその仕事は、お金にならないとか、ビザがスムーズに下りるところがないし。だから、前から駄目だと思っていたから。それより、社会経験を積むと考えると、（一般企業に）就職するのが正しいと思いました。NPO じゃなかったら、私が本当にしたい仕事は、他にないというか。私もまだよく分からないというか。とりあえず、仕事をするのが正解だと思って、他のところを（無理に）探す必要はないと思いました。急に。ところが、内定先で急に、“営業を担当するように”と言われました。

語り 10 に語られたように、他の会社を探すために苦労したくない気持ちと、NPO で働きたいが NPO は給料が低く、ビザも下りない可能性があるため、働くことができないという判断から、すでに内定をもらった会社で働くことを決めたようである。興味を持っている仕事をする、金銭的な苦労が予想され、生活者としての役割に満足できそうにないこと、ビザが下りないと労働者として日本で働けないことを理由に、就職活動を中止したと考えられる。ただ、社会経験を積むために内定先で働くことを決心したものの、内定先の業務内容が営業であり、それが気に入っていない様子が、上の語り 10 からうかがえる。その企業への就職について、さらに以下のように語っていた。

語り 11 内定先の雰囲気

ここは英語教育の出版社なんです。『営業』の相手も（社員と同じく）全部外国人たちです。それはかまいません。私には良いことです。しかし、英語教育に私は関心がないです。私唯一関心がないのが、言語教育なんです。（内定先で）私がどれだけうまく仕事できるかというプレッシャーもあるけど、いい点も多いから。会社の人々がとても良くしてくれるし、家族のように。

語り 11 に語られたように、シオンは内定を得た企業の業務内容を気に入っていない。ただ内定先の社員が、シオンに家族のように優しくしてくれると語っており、その点を重視してそこへの就職を決めたという。ここからシオンが、労働者として「気楽に働ける会社で働くべきだ」という役割意識をもっていると思われる。そして上の語りからは、内定先の社員が全員外国人であることをメリットとして受け入れていることがわかる。これは労働者として「利害関係のためにはときに相手に合わせる必要がある」という役割意識（語り 9）と関連深い。シオンは日本人と相性が合わないと感じているが（語り 2）、日本人社員と働くためには、日本人社員に気を合わせて、「私」らしくない対人関係を形成する必要がある（語り 6）。ただ語り 11 からは、シオンが外国人同士で働いたほうが望ましいと思っていることがわかる。

さらにシオンは内定先で働くメリットについて、以下のように語ってくれた。

語り 12 内定先で働くメリット

最初は事務職だと思っていたのに営業職だと聞いて悩んだけど。そのときは、家の事（契約）で大変だった時期で。《中略》すでに時期もすごく遅れてて。それに就活するとしても、どこに就職したいかも分からないのに、何のために就活をするのかと思いました。そして内定先はある程度、（アルバイトしているため）適応した会社で。正直に日本語と英語がすべて使える会社に入るのは大変ですよ。ほとんど、本当の大企業のような、立派な、ところではない限り、それを（日本語と英語を）活用する機会がないから。（内定先で）学べることも多いだろうし。

語り 11 と語り 12 に語られたように、シオンは内定先の業務内容（英語教育関連、営業担当）は気に入らないが、他のメリットがあると語っていた。それでは次節で、シオンの語りから分析した結果に基づいて、シオンのキャリア決定がいかにかに下されたかについて Super（1980）の枠組みを用いて考察する。

4. 考察

ここでは、前節の分析結果に基づいて、シオンの就職決定のプロセス、及びその決定に役割意識がいかにかに影響を与えたかについて探る。

4.1 シオンの日本就職決定のプロセス

まず、シオンは、編入学した頃から交際していた恋人と、大学卒業後に日本で働くという計画を立て、所属大学のキャリアセンターで情報収集したり、自ら情報収集したりしながら、積極的に就職活動に取り組んだ。興味を持っている NPO 企業のインターンシップにも応募し、インターンシップに参加した。ただ、NPO 企業での低賃金や過度な業務量を実感し、内定を断り、就職活動を続けた。4 年生になる頃、アルバイト先から内定をもらう。アルバイト先の賃金や業務量に魅力を感じてはいたものの、業務内容に興味がなく、興味のある仕事を見つけるために就職活動を続けていた。その時期に恋人と別れたが、日本に滞在し日本で就職するという決定に、影響はなかった。そして 4 年生の 1 学期目が終わる頃、内定先で働くことを決定し、就職活動を中止した。

以上、シオンの大学卒業後のキャリア決定がどのようになされたのか、Super（1980）のキャリア決定の仕方のディベロップメンタル・モデルを基に、シオンのキャリア決定の仕方を作成し、以下の図 3 に提示する。

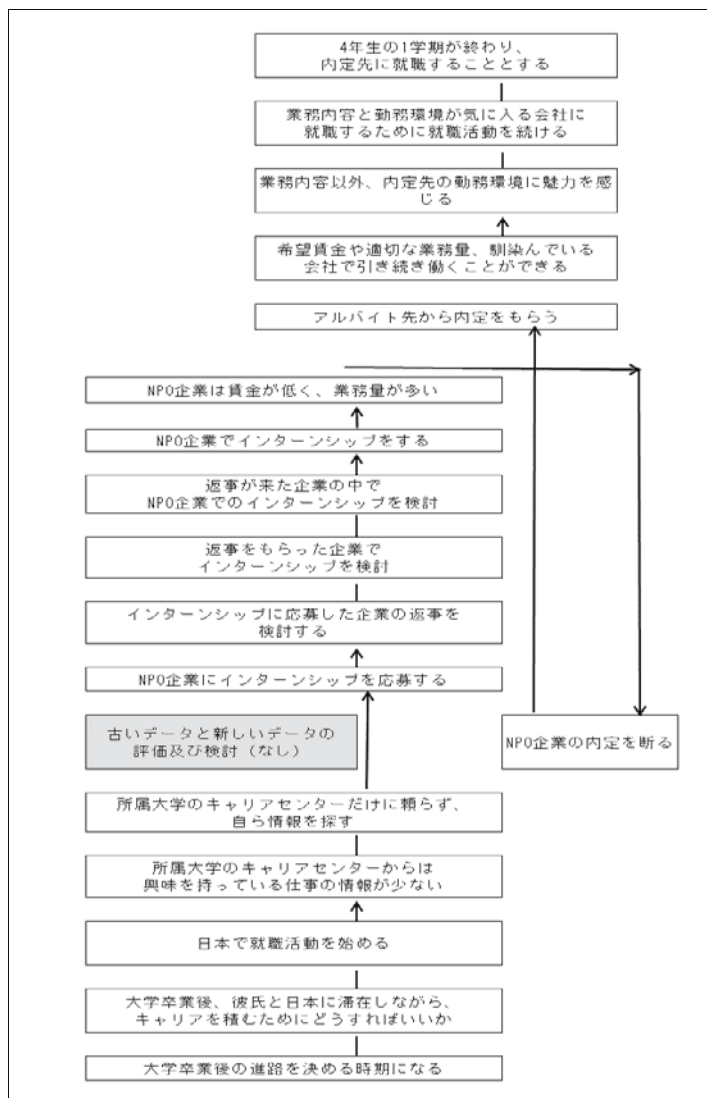


図3 シオンのキャリア決定の仕方

図3のキャリア決定のプロセスを見ると、NPO企業でのインターンシップを経験してからは、キャリア決定のプロセスとしてSuper（1980）が提示した全段階を踏んでいた。

4.2 シオンの日本就職決定に影響を及ぼした役割意識

シオンの大学卒業後のキャリア決定を分析した結果、以下のような要因がその決定に影響を与えていた。日本での就職決定を促進した役割意識には「+」を、阻害した役割意識には「-」を付して、図4に示す。

図4のように、シオンの日本の大学卒業後の進路（日本で就職し、日本滞在）決定に影響した

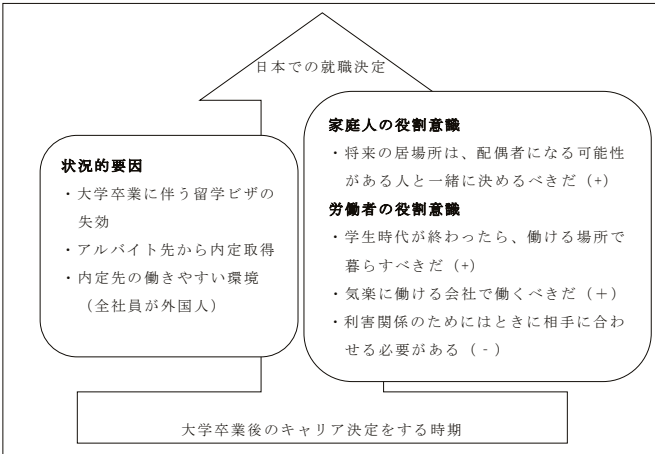


図4 シオンの日本での就職決定に影響を与えた要因

のは、家庭人、労働者としての役割意識だった。労働者としての役割意識としては、三つの具体的な意識を記述することができ、それぞれ就職決定を促進または阻害していた。

4.3 シオンの日本就職決定に影響を及ぼした役割意識

本調査では、シオンという一人の韓国人留学生の就職活動について、そのキャリア決定のプロセスと影響を与えていた役割意識について分析考察した。シオンが下した日本就職決定に大きく影響を与えたと思われる、家庭人としての役割意識は、留学期間中にできた恋人との将来の計画を立てたことが、労働者としての役割意識は留学中に接した日本人との関係形成と関連深い。

最後に、シオンの日本への留学決定と日本での就職決定に、それぞれ影響を与えた役割意識を図示することで、シオンの役割意識がどのようにキャリア決定と結びついているのか考えたい。

図5の通り、シオンによる二つのキャリア決定には、いずれも親族的所属と社会的所属が影響していた。前者については、子としての役割意識から家庭人の役割意識へと、生まれてから子として所属していた家族から、将来配偶者として築く可能性がある家族へと、決定に影響を与える

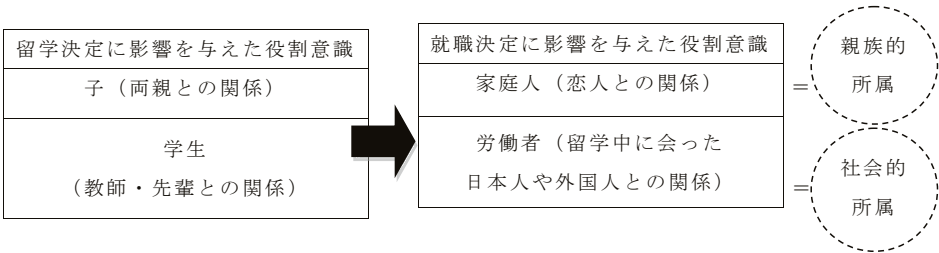


図5 シオンの二つのキャリア決定に影響した役割意識

要因が変わっていた。従属的に所属していた立場から、主体的に家族を構成する立場になっていたと見ることもできるだろう。後者についても、教師や先輩という従属的な相手との関係から、留学生活の中で自ら関係を築いてきた相手へと、影響を受ける相手が変わっていたと考えられる。

5. さいごに

以上、本研究ではシオンという1名の就職決定に注目し、その決定プロセスと影響を与えた役割意識について見てきた。就職率という目先の目標だけではなく、留学生及び外国人労働者の長期的な定着を見据えたときに、これら複数の役割意識は非常に重要である。

ここでは最後に、留学生にどのようなキャリア支援が必要なのか、本研究で得られた示唆をまとめることとする。シオンの家庭人及び労働者としての役割意識は、シオンが留学生だから見られた役割意識ではなく、母国で就職活動をしている日本人大学生にも見られる役割意識であろう。ただ日本人大学生との大きな違いの一つは、「留学ビザ」からの切り替えが必要な点だろう。語り10や図4から分かる通り、ビザが取得できるかどうかの懸念はキャリア決定に大きく影響している。ビザの切り替えについては、留学生もしくは就職先の企業が手続きを進めることが一般的であり、教育機関、特に4年制大学でビザについての説明会などが催されることはあまりないのではないだろうか。留学生がビザについての正確な知識を得られる場を、設けてもいいかもしれない。また、これは他の学生に効果的かどうかは分からないが、本研究の調査協力者であるシオンは第3章と第4章にまとめた分析結果を見て、「自分のキャリア決定を把握することができ安心した」と述べてくれた。学生にとって、教育機関終了後のキャリア決定は非常に悩ましいものである。図3のようなプロセス図を自身で振り返り書かせるだけでも、状況を把握し決定プロセスを次の段階に進められる学生もいるだろう。そのようなキャリア教育を、ここで提言したい。

ただ言うまでもなく、本稿はある1名の留学生について分析し記述したものである。この留学生と異なる背景を持ち、異なる文脈にいる留学生を対象として研究を継続していくことは、その適用の可能性をさらに広げることになるだろう。それを今後の課題と捉えて、引き続き留学生のキャリアについての研究を蓄積していきたい。

注

- 1) 語りの中の記号は以下のようである。
 () …前後の文脈に基づいて筆者が追加した語句
 『 』 …発話者が日本語で話した部分
 〈 〉 …インタビュー어의言葉

引用文献

- 李奎台・宮城徹（2018）「日本留学というキャリア決定に影響を与えた役割意識——ライフパン・ラフスペース理論的アプローチの枠組みから——」『日本語学研究』57, pp.101-117.
- 独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html（2018年12月1日閲覧）.
- 法務省入国管理局（2014）「平成25年における留学生の日本企業等への就職状況について」http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri07_00080.html（2018年12月1日閲覧）.
- Super, D. E.(1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 13, pp. 282-298.

